あら玉のとしたちかへるあしたよりまたるゝ物は鶯のこゑ

おほきさいの宮に、宮内といふ人のわらはなりける時、だいごのみかどのおまへにさぶらひけるほどに、おまへなる五葉に、鶯のなきければ、正月はつねのひつかうまつりける、

松のうへになくうぐひすのこゑをこそはつねの日とはいふべかりけれ

〔枕草子三〕鳥は

鶯はふみなどにもめでたき物につくり、聲よりはじめて、さまかたちもさばかりあてにうつくしきほどよりは、こゝのへのうちになかぬぞいとわろき、人のさなんあるといひしを、さしもあらじと思ひしに、十とせばかりさぶらひてきゝしに、まことにさらにをともせざりき、さるは竹もちかく、こうばいもいとよくかよひぬべきたよりなりかし、まかでゝきけば、あやしきいへの見どころもなき梅などには花やかにぞ鳴、夜るなかぬもいぎたなきこちゝすれども、いまはいかゞせん、夏秋の末までおひごゑになきて、むしくひなどようもあらぬものは、名をつけかへていふぞくちをしくすごきこゝちする、それもすゞめなどやうに、つねにあるとりならば、さもおぼゆまじ、はるなくゆゑこそはあらめ、としたちかへるなどおかしき、ことに歌にもふみにもつくるなるは、なほ春のうちならましかば、いかにおかしからまし、人をも人げなう、世のおぼえあなづらはしうなりそめにたるをばそしりやはする、とびからすなどの上は、見いれきゝいれなどする人、世になしかし、さればいみじかるべきものとなりたればとおもふに、心ゆかぬこゝちする也、まつりのかへさ見るとて、うりんゐん知足院などのまへに車をたてたれば、郭公も志のばぬにやあらんなくに、いとようまねびにせて、木だかき木どもの中に、もろごゑになきたるこそさすがにをかしけれ、

〔風俗文選三譜〕百鳥譜